

「環境の時代」を振り返る

「生活」と「自治」への夢と
これから訪れるかもしれない世界について

総合人間学会 2025年度大会
シンポジウム

大阪公立大学 上柿崇英

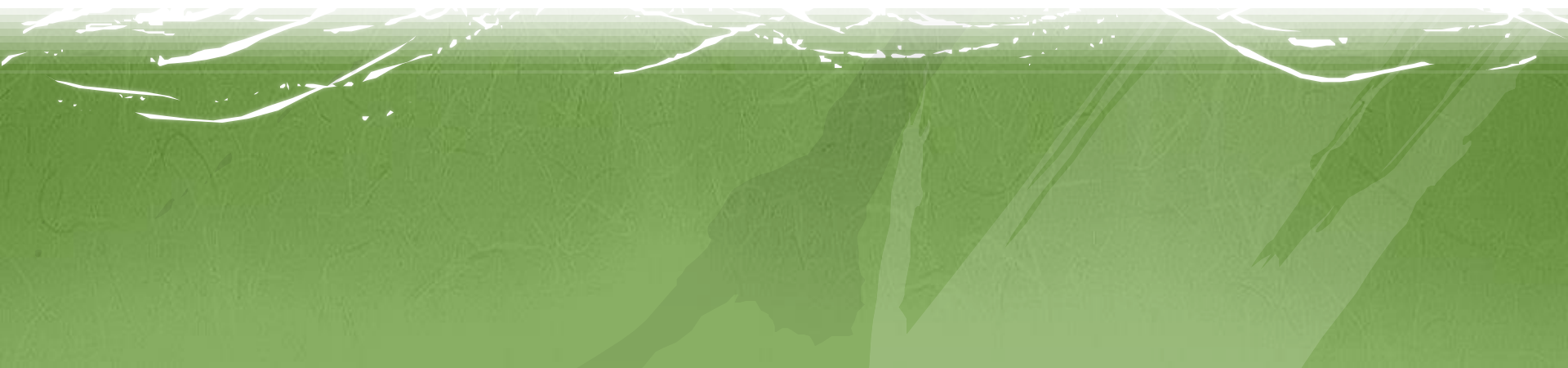
25/5/31

問題意識と発表の流れ

□ 問題意識と発表の流れ

- 環境哲学の立場から「環境」という主題がいかなる意味を持つものだったのかを振り返る。特にそれが日本社会ではどのように受容されたのかを明らかにする（そのなかで「里山」がどのような位置づけにあったのかについて述べる）。
- それから30年、環境思想の現状について、SDGs、脱成長主義、環境加速主義、〈自己完結社会〉といった視点から明らかにしつつ、われわれが本質的にどのような世界へと向かっているのかということについて考察する。
- そのなかで、哲学／倫理学が問うべき「長期的ビジョン」の問題と、現代社会が抱えている「共同行為の不可能性」の問題について提起する。

1. 「環境の時代」とは何か？



1. 「環境の時代」とは何か？

□ 「環境」概念に込められた四つの意味

- ① 特定の主体を想定した場合の“単なる外界”
- ② 特定の主体が“影響を受ける外界”
- ③ 特定の主体が“影響を与える外界”
- ④ 特定の主体の生存基盤、特に“保護の対象となる外界”

特定の主体を想定した
場合の“単なる外界”



主体

子育てするには良
い“環境”、など

□ 「環境」(environment) のも
ともとの意味は①であり、「環
境にやさしい〇〇」といった現
代の使用法はなかった。

□ 環境主義 (environmentalis)
というイデオロギーがもたら
した新しい意味合いである。

1. 「環境の時代」とは何か？

□ 環境主義の成立と1960年代～1970年代の時代風景

- ◆ 第二次世界大戦の終結以降、世界的な経済発展によって先進国では工業化が促進した。
- ◆ 大量生産・大量消費・大量廃棄社会の到来。
- ◆ 大衆（マス）社会。単純労働、画一的なマスメディア、テクノクラシーによる“人間疎外”
- ◆ その中で現代社会の矛盾を問う新しい世代の運動が起こっていた。
（反戦運動、反核運動、公民権運動、女性運動・ ・ ・ etc.）

□ それは「豊かさ」と「繁栄」が頂点に達した時代だからこそ、そうした社会の矛盾を問とうとする機運もまた高まった時代であった。



『ビジュアルワイド図説日本史』東京書籍編集部、東京書籍、1997年、222頁より



<http://gahag.net/>



『新詳世界史図説』浜島書店編集部、浜島書店、1993年、298頁より

1. 「環境の時代」とは何か？

□ 60年代から70年代に認識されていた諸問題

- 産業化のもたらす健康被害
 - ✓ スモッグ・公害：例えば工場や自動車から放出される有害物質による健康被害（大気汚染や水質汚染→ 四大公害）
- 生態系の破壊
 - ✓ 酸性雨：汚染された大気が酸性となり樹木を広範囲で枯らす
 - ✓ 砂漠化・森林破壊：開発による森林の減少と熱帯雨林の荒廃
 - ✓ 廃棄物：廃棄物からの有害物質による土壌汚染
 - ✓ 野生動物の減少：森林破壊、汚染、乱獲などによる野生動物の減少
- 世界問題
 - ✓ 資源枯渇：化石燃料の枯渇
 - ✓ 貧困：南北格差、途上国の構造的な従属
 - ✓ 人口増加：貧困に伴いいっそう人口が増加

1. 「環境の時代」とは何か？

□ 環境主義の成立

- 「環境問題」 (environmental problem) : これらの問題は個別的に存在しているのではなく、全部がつながっている（切り離して考えることができない）。人間の生存の関わる環境劣化の問題という意味で環境問題というひとつの新しいカテゴリーが与えられた。
- 「環境主義」 (environmentalism) : 環境運動は、環境危機の克服を目標にしながら、人々の意識を変え、社会を変え、新しい世界の在り方を模索する思想的な側面を持つところに特徴があった。

□ 「環境」とは、客観的な対象ではなく、環境問題を契機として、文明社会と人間のあり方を根本的に問うイデオロギーとして出発したものであった。

1. 「環境の時代」とは何か？

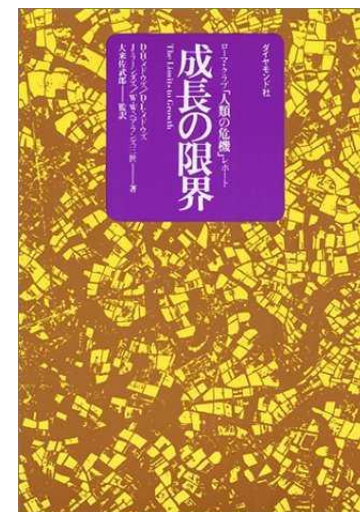
□ レイチェル・カーソン『沈黙の春（1962年）』

- → DDTを含む合成化学物質（殺虫剤、除草剤）の危険性を生物濃縮の原理として説明。
- → 文明や繁栄の象徴としての科学技術が、予想しない形で人間や世界そのものの破壊として還ってくる。



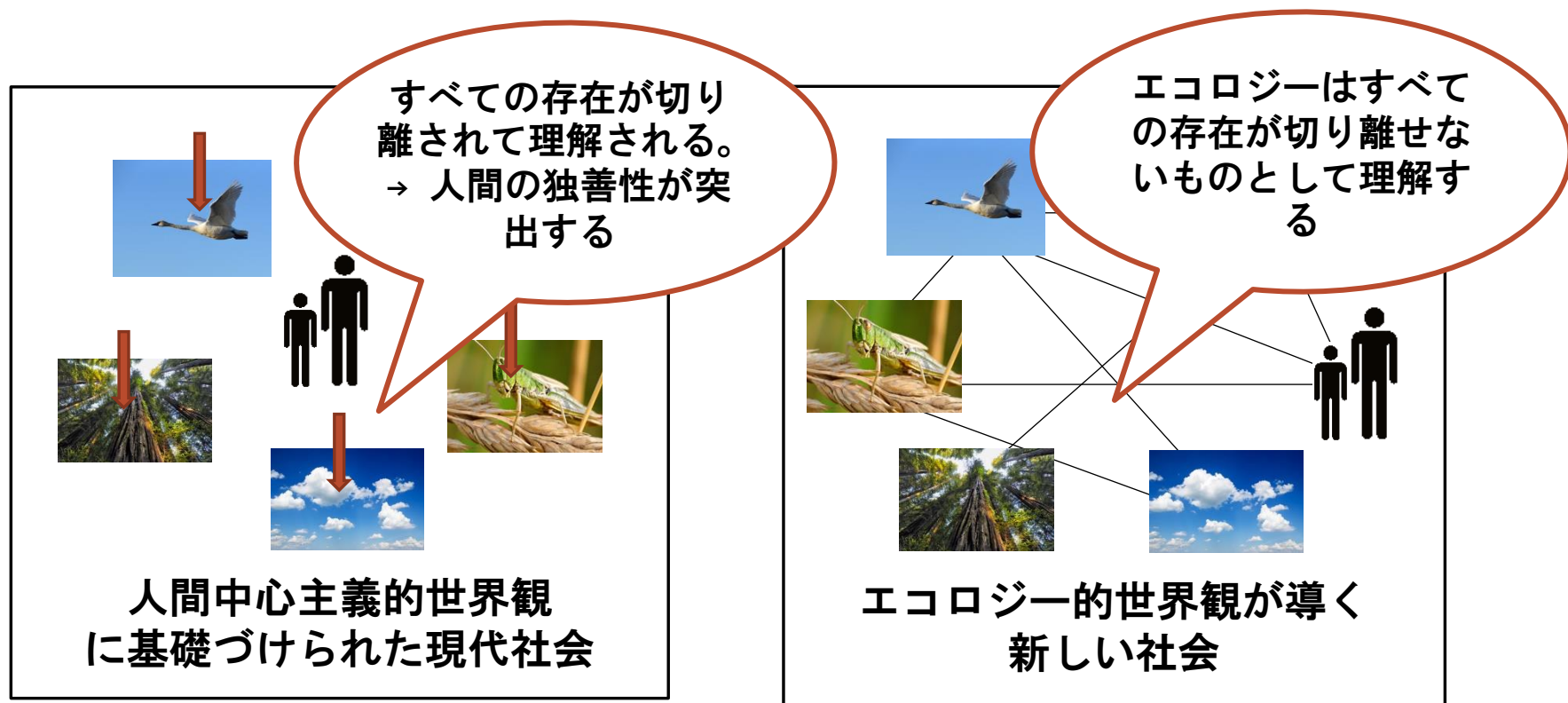
□ ローマクラブ『成長の限界』（1972年）

- → 私たちは物事の成長を単線的にイメージしがちだが、実際の成長は幾何級数的なものである。
- → 私たちは科学技術が何時か問題を解決してくれると素朴に信じてきたが、科学技術の進展は幾何級数的な成長にはたちうちできない。
- → 有限な地球の内部で何かが無限に拡大することなどありえない。



1. 「環境の時代」とは何か？

□ 人間と自然の共生を目指す エコロジー思想の問題意識



環境問題の本質を人間中心主義として理解し、すべての存在がつながりあうエコロジー的な世界観（人間中心主義を超える）こそが、危機を克服する切り札になると考えられた。 → 人間と自然の関係性（共生）という問題意識

1. 「環境の時代」とは何か？

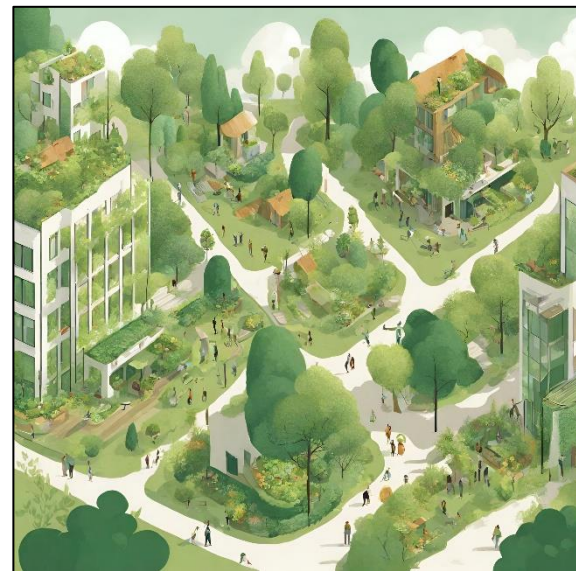
□ 「エコ・ユートピア」という夢

□ → かつて環境、自然、エコを語ることは、「もうひとつの社会」を語ることだった。

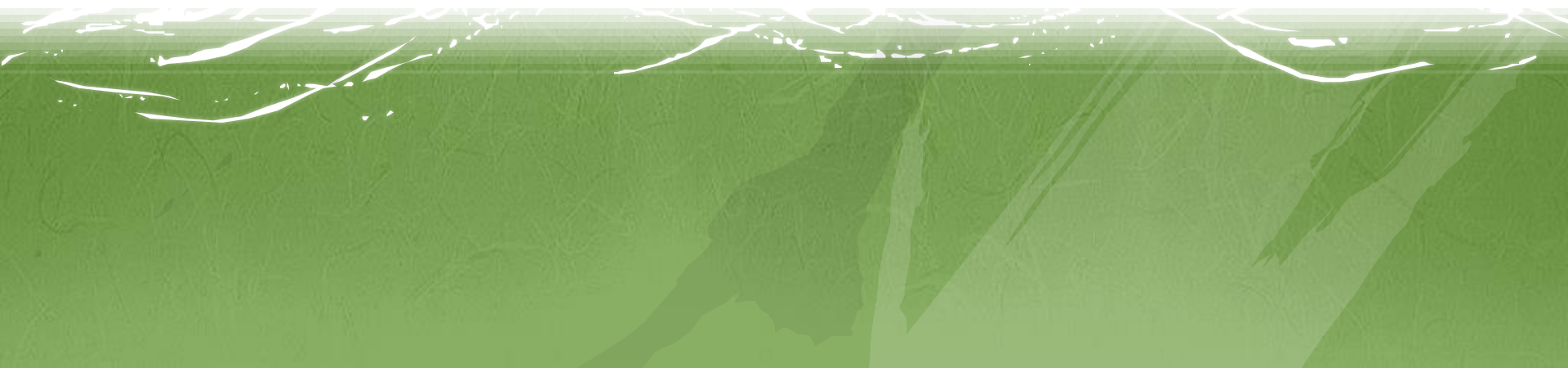
□ ローカルな土地に根ざした地産地消のコミュニティを基盤とする社会。

□ 労苦を軽減する技術などは活用したうえで、人々の豊かさの基準を、スピードや効率、モノの所有や消費、貨幣的なサービスの享受ではなく、精神的なもの、例えば自然とのふれあい、健康的でやりがいのある労働、地域社会における相互扶助（ケア）、レクリエーション、創造的な活動といったものに置くような社会。

□ それはスピードや競争にまみれた現在のライフスタイルよりも、はるかに人間らしく、人間を幸福にする。



2. 環境思想／「エコ・ユートピア」の思想は日本でどのように受容されたのか？



12 2. 環境思想／「エコ・ユートピア」の思想は日本でどのように受容されたのか？

□ 環境思想の日本での受容

- 1992年の国連環境開発会議を契機として環境問題が主題化され、日本でもあらゆるメディアが環境問題や環境思想を主題化し、その問題意識や世界観が浸透する。

- 単に解決すべき環境問題が存在するという意味を超えて、文明とは何か？ 進歩とは何か？ 幸福とは何か？ 生きるとは何か？ 社会（人類）のあるべき姿とは？ といった問題意識が日本社会でも焦点化。

- 当時の環境主義／エコロジー思想の影響力は、今日の「多様性」や「ジェンダー」論に似ている。

（時代の転換を象徴しつつ、強力な理想と規範性を伴い急速に浸透）



【YouTube】Michael Jackson - Earth Song (1995)「僕は世界に何をしたんだ？」といった印象的な歌詞が綴られる



13 2. 環境思想／「エコ・ユートピア」の思想は日本でどのように受容されたのか？

□ 「かかわり」、「つながり」、「全体性」への着目

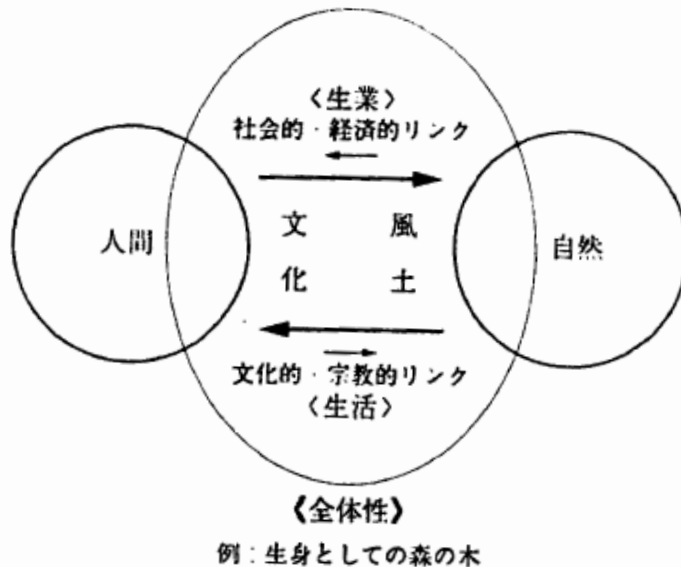


図3 〈生身〉の関係＝かかわりの全体性

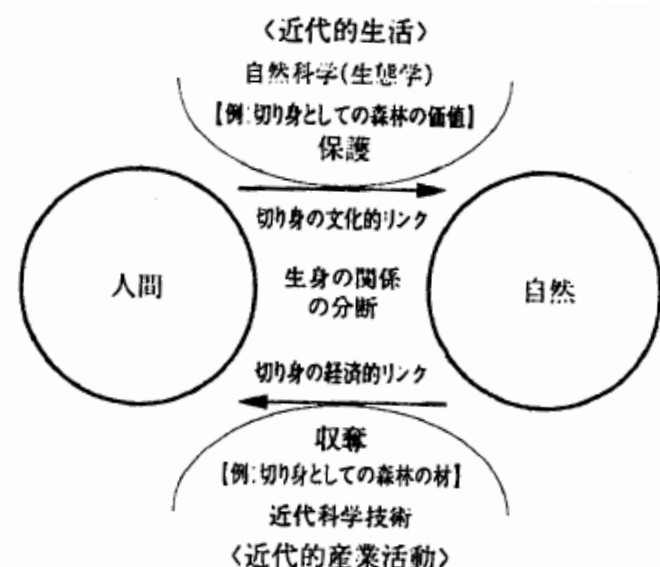


図4 〈切り身〉の関係＝かかわりの部分性

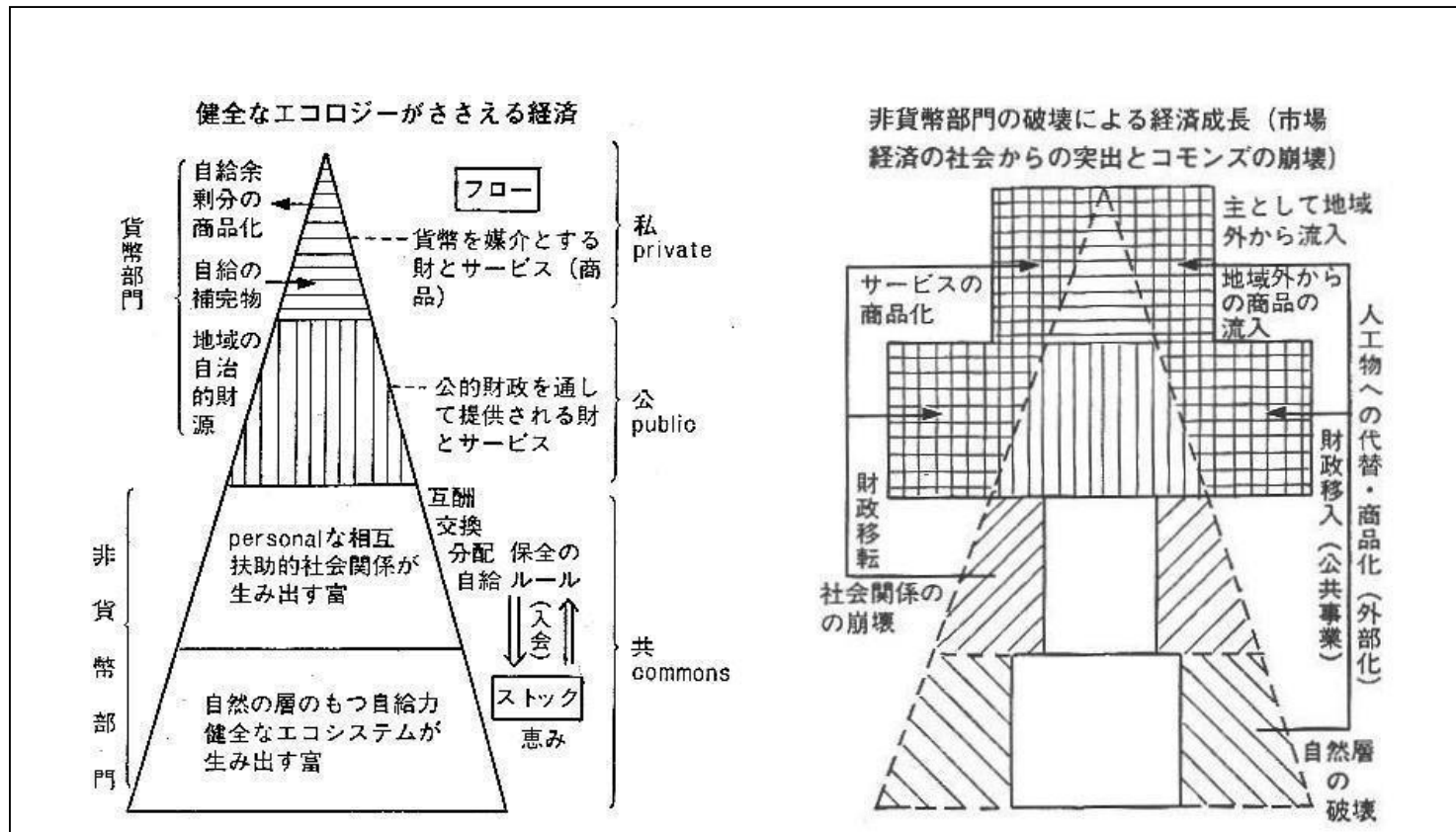
(鬼頭秀一 (1996) 『自然保護を問いなおす——環境倫理とネットワーク』ちくま新書 p. 130 より)

- 自然と人間の間にある「社会的リンク」が分断され、「生身の関係」(かかわりの全体性)から「切り身の関係」(関わりの部分性)へ
- 自然と人間の間にあったはずの「かかわり」、「つながり」、「全体性」の回復という問題意識。

14 2. 環境思想／「エコ・ユートピア」の思想は日本でどのように受容されたのか？

□ コモンズへの着目

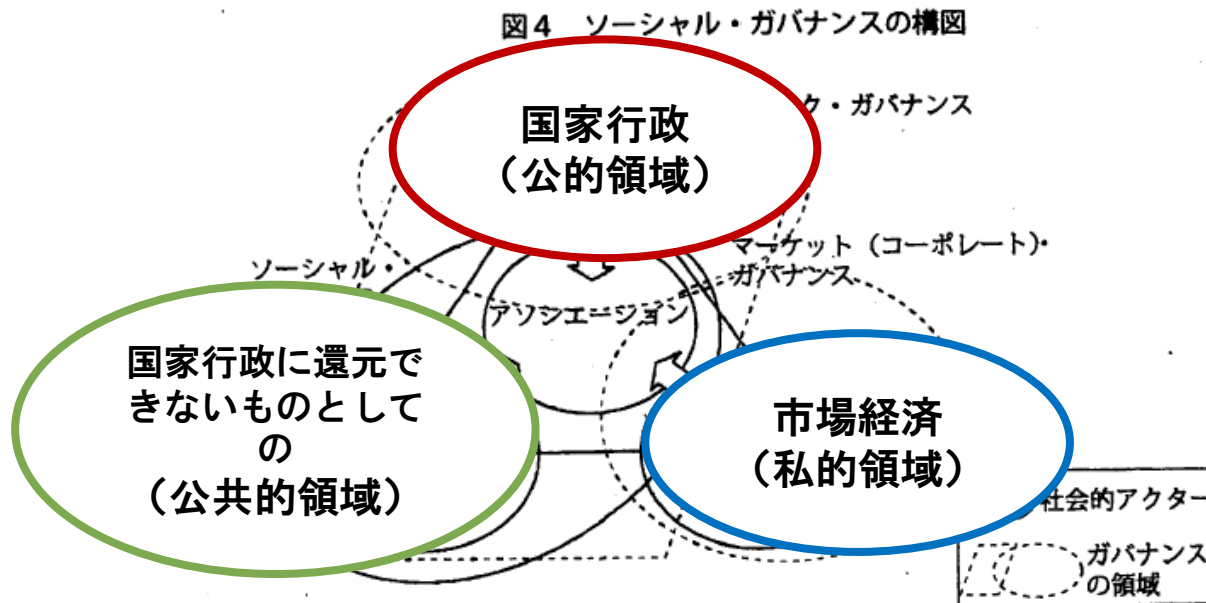
(多辺田政弘 (1990) 『コモンズの経済学』学陽書房、図3 (p. 52)、図4 (p. 56) より)



□ “成長” や “繁栄” の背後で見失われてきた「生活」の領域に目を向け、「生活」を取りもどすという問題意識。

15 2. 環境思想／「エコ・ユートピア」の思想は日本でどのように受容されたのか？

□ 「新しい市民社会論」とアソシエーションへの期待



(神野直彦／澤井安勇編 (2004) 『ソーシャル・ガバナンス——新しい分権・市民社会の構図』 東洋経済新報社 p. 49より)

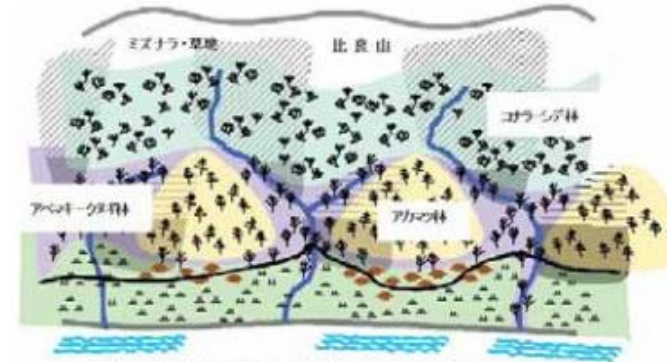
- 公共性、公共圏、市民社会、アソシエーションは、いずれも国家行政システムにも、市場経済システムにも還元できない自律的な圏として想像された。
- 第3領域としての「**公共的領域**」の充実、拡大によって「**自治**」を拡大させていくというメッセージが広く共有されていた。

16 2. 環境思想／「エコ・ユートピア」の思想は日本でどのように受容されたのか？

□ 環境思想における「里山」とは何だったのか？

- 「里山」とは、「人里近くにあって、その土地に住んでいる人のくらしと密接に結びついている山・森林」（『広辞苑』）で、人々の関与によって持続的な資源利用・管理が行われてきた領域（⇔ 原生自然）

- そこには人間と自然を「生身の関係性」でつなぎ、人々の具体的な「生活」があり、その「生活」を日々の実践として実現していく「自治」の姿を確認することができる。

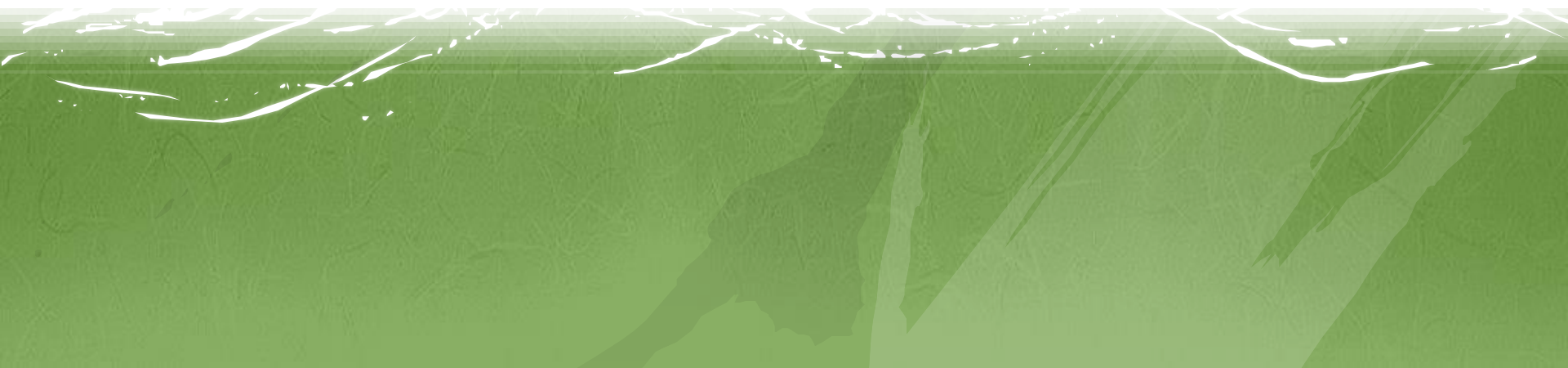


琵琶湖西岸「里山」域の現在の植生景観の様式図（人工林を除く）

『里山に住む生き物—滋賀県内の調査から』森林総合研究所関西支部 p.2 より

- 「かわり」／「つながり」／「全体性」の回復とともに、「生活」を取りもどし、「自治」を取りもどすというイメージこそが、「エコ・ユートピア」によって触発され、日本で独自に展開されたビジョンであった。
- → 「里山」こそは、その象徴的な役割を担っていたのではないか？

3. 「環境の時代」から「SDGsの時代」へ



3. 「環境の時代」から「SDGsの時代」へ

- SDGs（持続可能な開発目標）：国連で2015年に採択された「2030年までに達成すべき17の目標169のターゲット」のこと。



- SDGsは現在の最もスタンダードな環境思想／環境言説とすることができる。
- 環境保護、経済成長、社会的公正のすべてを両立させることを目指す。
- 個々の課題や実践はいずれも重要なものであるが、われわれはSDGsの先にどのような未来を見据えているのか？（⇔「エコ・ユートピア」）

3. 「環境の時代」から「SDGsの時代」へ

□ SDGsが目指しているものとは？



- SDGsに体现されている、経済成長も大事、環境保護も頑張りつつ、誰ひとり取り残さない……が実現した世界とは、80億人の全人類に、最富裕国の標準的な物質的生活、社会的生活を拡大させていく世界のことではないのか？
- そのために必要なのは、地産地消のコミュニティ社会でも、コモンズの再興でも、自然と触れあう精神的な豊かさでもなく、その逆に、現在主流の社会経済システムを改良／発展／普及させていくこと、そしてそのシステムを支えるための経済成長ではないのか？ (→ 「エコ・ユートピア」の形骸化)
- → そしてSDGsの実践の先に、本当にわれわれはそのような未来を築くことができるのだろうか？ → 「地球1個分問題」という未解決問題。

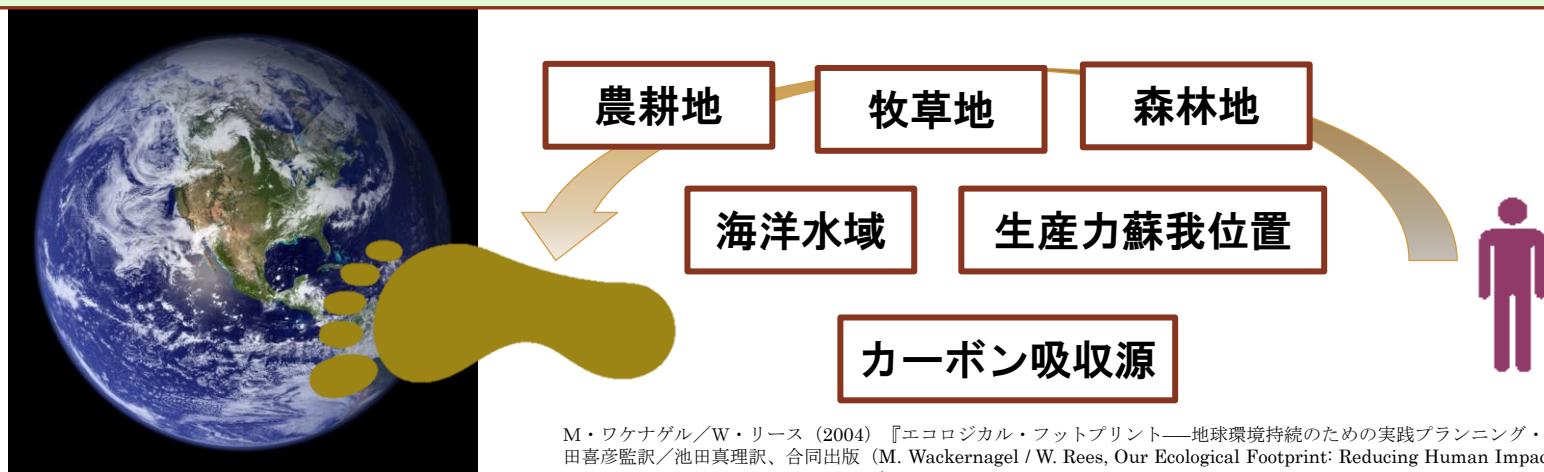
3. 「環境の時代」から「SDGsの時代」へ

- エコロジカル・フットプリント (ecological footprint)、人々の環境に与える負荷を、土地面積に換算することで環境負荷を表現する指標

換算される土地の種類

- a. 農耕地、b. 牧草地、c. 森林地、d. 海洋水域（漁場）、
e. カーボンフットプリント（CO₂の吸収に必要な土地）、f. 生産能力阻害地

→ 世界の平均的な生産性を持つ土地1haをエコロジカル・フットプリント1gha（グローバルヘクタール）と表記する。



3. 「環境の時代」から「SDGsの時代」へ

□ エコロジカル・フットプリント（EF）の導出

- 世界全体の実際に存在する生物生産量／世界人口＝ 一人の「割り当て面積」が算出。
- A国全体のEF／A国民の人口＝ A国民一人当たりのEFが算出。
- A国民一人あたりのEF／「割当面積」で、「地球〇個分の生活」を推計できる。

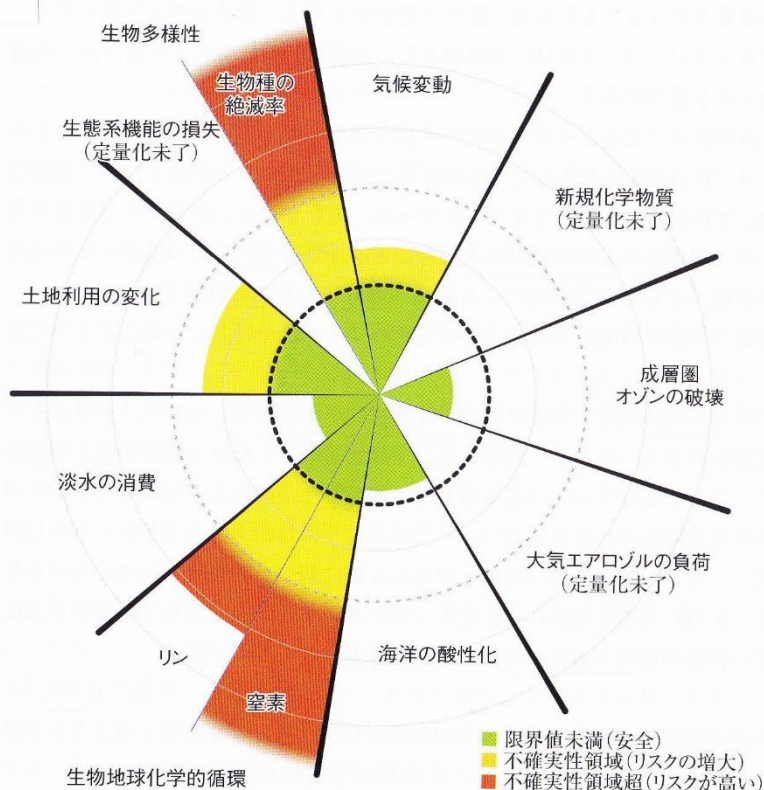
□ 2018年時点の世界の生物生産力は約121億gha、世界人口77億人だとすると、ひとりあたりの割当面積は、およそ1.6gha。
（※ghaは地球の平均的な生物生産能力を持つ土地面積を表す）

□ 2018年時点の一人あたりのghaの例、日本4.6gha、米国8.1gha、中国3.8gha、カタール14.6gha。

※ Global footprint network (<https://data.footprintnetwork.org/>)より。データは2018年のもの。

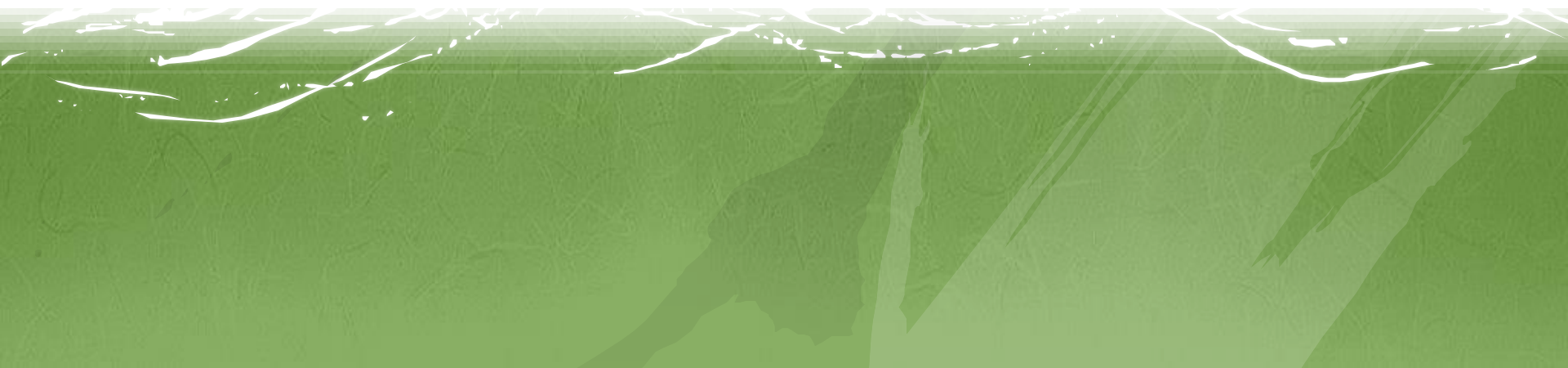
22 3. 「環境の時代」から「SDGsの時代」へ

- プラネタリー・バウンダリー (planetary boundaries) : 現在の地球環境を維持するための安定領域とともに、環境の急激な変化を引き起こしうる臨界点 (tipping point)を示したもの



- 私たちはこれほど多くの格差を抱えた現時点で、すでに「地球1個分」の容量に近いか、すでに超えている可能性が高い。
- ならばSDGsの想定する未来など不可能ではないのか？

4. われわれはどこへ向かっているのか？



4. われわれはどこへ向かっているのか？

□ SDGsが目指しているものとは？



<https://www.unic.or.jp/>

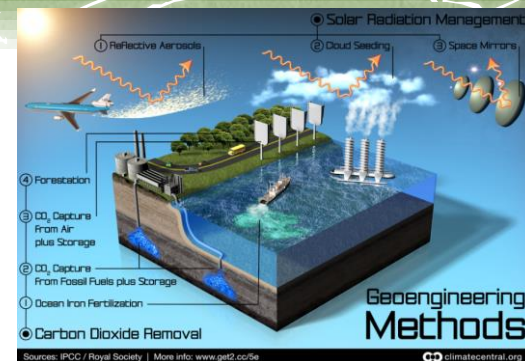
- 「地球1個分」の限界を踏まえるのなら、やはり私たちは「地球1個分」で80億人が生きていけるよう、「社会を地球に合わせる」よう変えるべきなのではないか？ → 脱成長主義 (degrowth) (「エコ・ユートピア」の再来?)

4. われわれはどこへ向かっているのか？

- われわれは脱成長主義ではなく、むしろ**環境加速主義** (environmental accelerationism) という“**賭け**”に向かっている。

- 現在の社会経済システムを基本的には維持したまま、**科学技術の力によって地球環境を操作、管理、制御し、それによって「地球1個分」という自然環境の限界を乗り越えていこうとする思想**

- **加速主義** (accelerationism)
 - 2010年代に米国を中心に流行した現代思想。
 - 資本制社会がさまざまな問題を抱えていることを認めつつ、それでもなおわれわれは現在主流の社会経済システムをよりいっそう加速させるべきだとする。
- **環境加速主義**は、加速主義の特徴を環境思想に転用した発表者による造語。



4. われわれはどこへ向かっているのか？

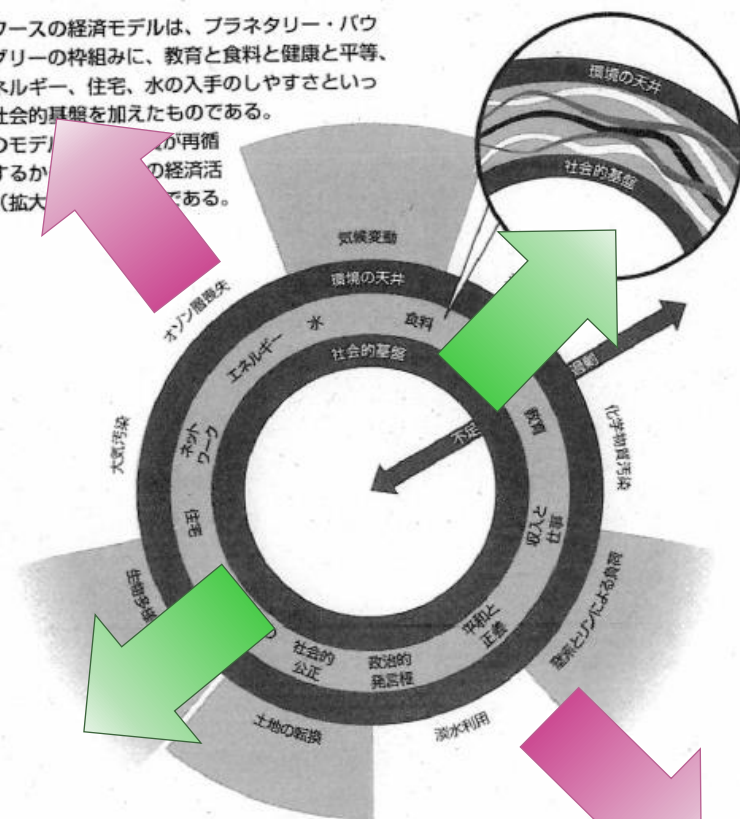
□ 「必要不可欠なニーズ」の欺瞞性

- 持続可能性（sustainability）の議論では、必要不可欠なニーズ（basic needs）という表現をよく用いるが、人々が望んでいるのは、水や食料や最低限の医療や社会保障が整えば良いというのではない。
- 富裕国の人々は、プライベートな快適な空間で、グルメや旅行やi-phonで贅沢をしながら、非富裕国には不可欠なニーズが整えられれば良い、という論理は通用するのだろうか？



ラワースの経済モデルは、プラネタリー・バウンダリーの枠組みに、教育と食料と健康と平等、エネルギー、住宅、水の入手のしやすさといった社会的基盤を加えたものである。

このモデルは、経済活動（拡大）と環境（縮小）の循環を表現している。

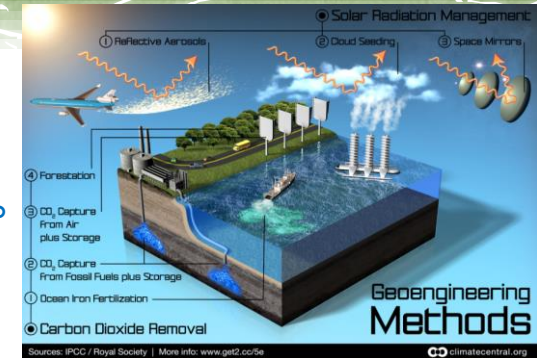


ドーナツ経済

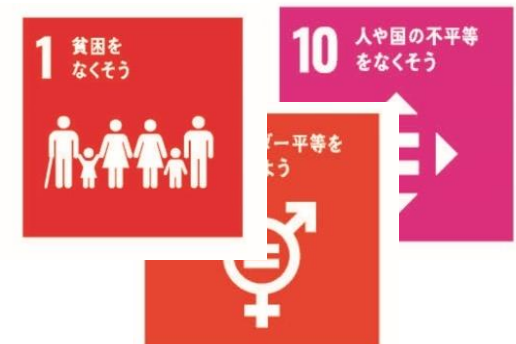
4. われわれはどこへ向かっているのか？

□ 科学技術主義の新たなフェーズとしての環境加速主義

- 1. 無配慮／無計画な技術から、管理、操作、制御のための技術へ。
 （無計画に自然を破壊するかつての技術主義とは異なり、自然環境に積極的に介入し、操作、管理、制御していくことを目指す）
- 2. 人間社会を自然環境に適合させるための技術ではなく、自然環境を人間社会に適合させる技術へ。
 （脱成長主義＝「社会を地球に合わせる」試みだとするなら、環境加速主義＝「社会に合うよう地球を作り替える」試み）
- 3. 自然を復元する技術ではなく、人工環境への代替化の技術へ。
 （人工環境の具体的なイメージは「農地」「庭園」「自然保護区」。それを地球規模へと展開させる。自然環境の社会システムへの「包摂」（inclusion））
- 4. 躊躇のある人間中心主義ではなく、躊躇のない人間中心主義へ。
 （ライフスタイルの変化を本命とした消極的な科学技術の使用ではなく、単なる欲望の充足や富の蓄積、経済成長のためでもなく、80億人全員が、自由で平等で、自己決定、多様性が保証された世界を創り上げるために、積極的に環境を改変する）

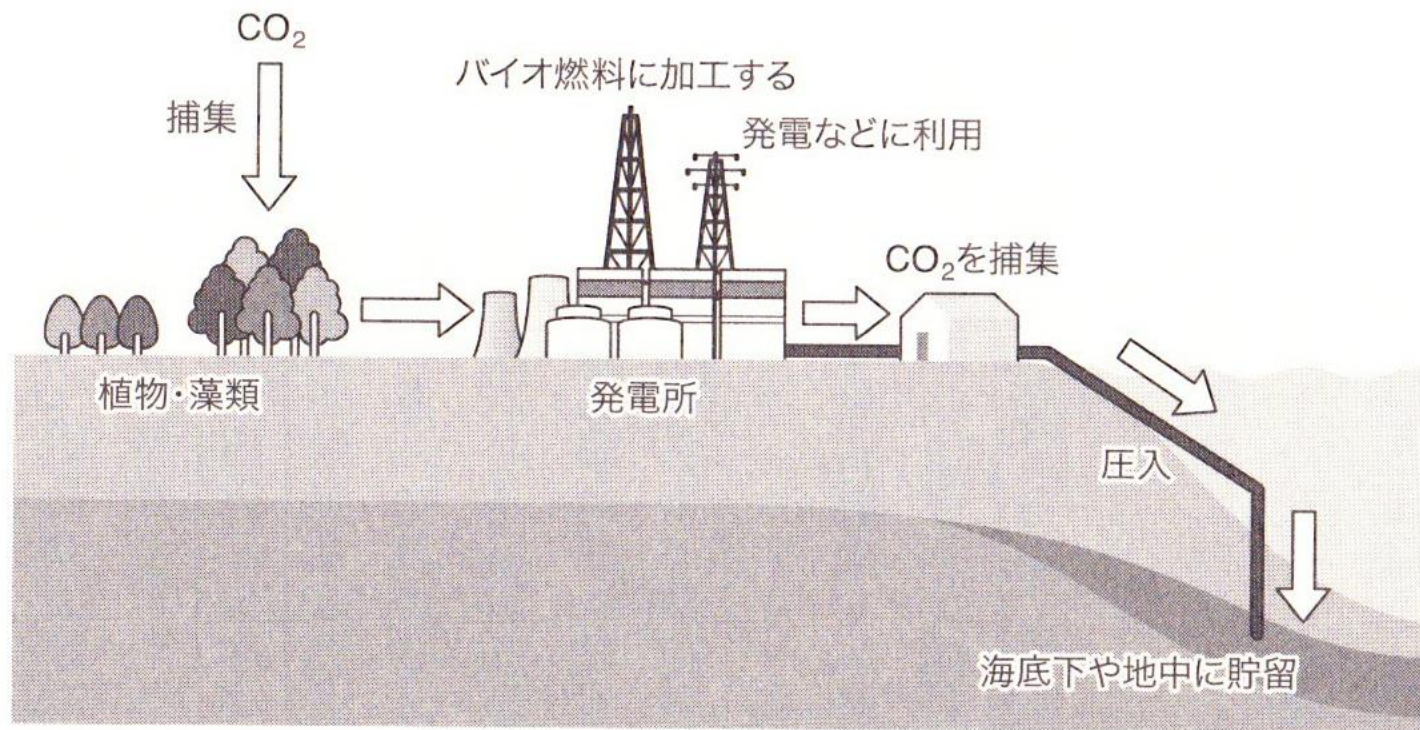


climatecentral.org



4. われわれはどこへ向かっているのか？

- 発生したCO₂を地中や海中に封じ込める
二酸化炭素捕集貯留技術（CCS：Carbon dioxide Capture and Storage）



水谷広 (2016)
『気候を人工的に操作する：地球温暖化に挑むジオエンジニアリング』より

4. われわれはどこへ向かっているの

□ **すでに進められている二酸化炭素捕集貯留（CCS）**

□ **経済産業省を中心に、日本でも北海道の苫小牧で大規模なCCSの実証試験が実施。2016年～2020年にかけて、CO2圧入量30万トン进行達成。**



2020年の経済産業省の記事

□ **政府は2030年ごろの事業化を目指している。**

□ **「貯留したCO2は約1000年後も地層にとどまる。脱炭素を進める大きなカギになる」（苫小牧施設担当者の言葉）**

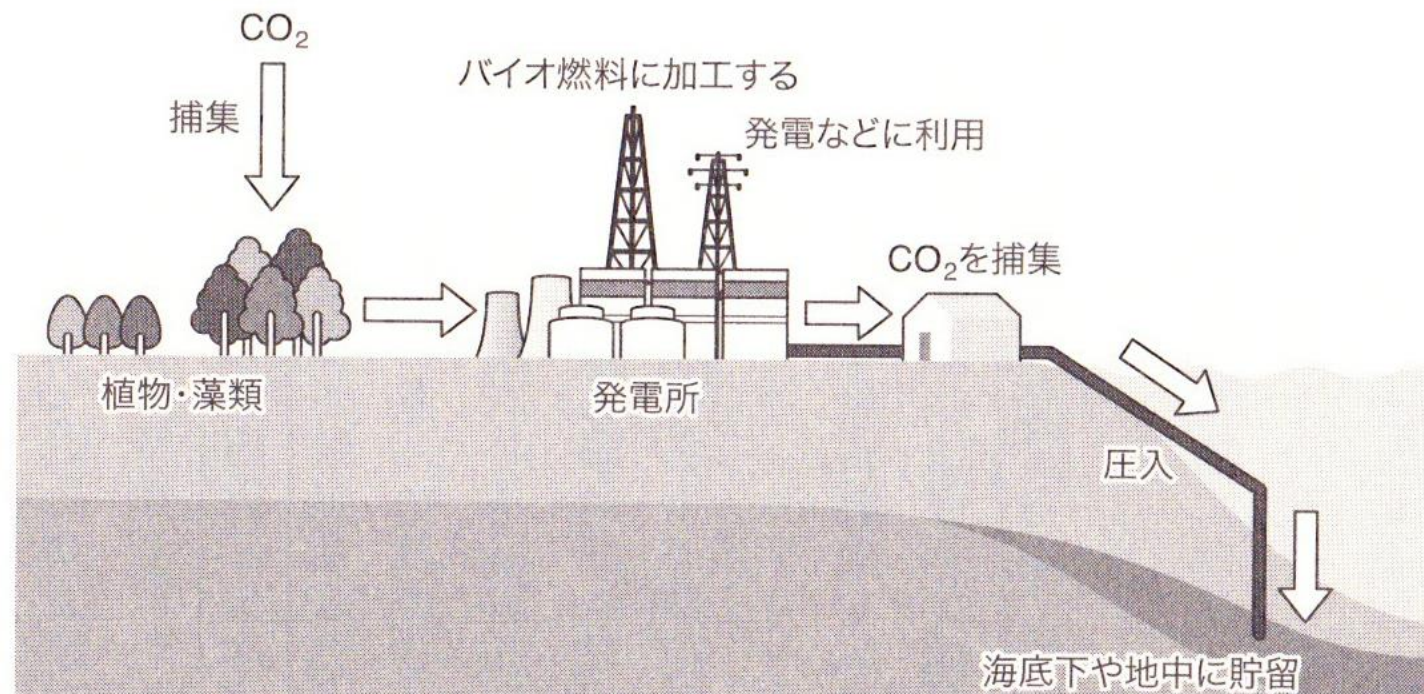
□ **経済産業省は、2050年までに現在の排出量の1～2割に当たる年1億2000万～2億4000万トンを貯留する計画。**



2024年5月の読売新聞の記事「二酸化炭素を地中に貯留する「CCS」、実験本格化...地球温暖化対策の「切り札」にできるか」

4. われわれはどこへ向かっているのか？

□ バイオマス炭素捕集貯留



水谷広 (2016)
『気候を人工的に操
作する：地球温暖
化に挑むジオエン
지니어リング』より

- バイオマス発電を経由してCCSを実施すれば、理論的には大気中のCO₂の回収を意味することになり、大きな期待がされている。
- バイオマスの成長に必要な時間という制限があるものの、超効率的な海藻類
→ 微生物による分解 → バイオガス → 発電 → CCSという方法は？

4. われわれはどこへ向かっているのか？

□ バイオマス炭素捕集貯留をめぐる

- CCSは、今日有望な気候変動対策技術として期待されている。しかしその行為には、単なる気候変動対策以上の意味が含まれている。
 - もしも大規模な「炭素の回収」が可能なのだとするなら、**究極的には脱炭素社会（再生エネルギー社会への移行）は不要である**とは言えないか？
 - 化石燃料を使うことで、貧困が解決し、より自由で平等な社会、より「生きがいも、経済成長も」達成できるのなら、**なぜ私たちは化石燃料の使用を踏みとどまる理由があるのか？**
→ こうした主張が出てこないとは限らない。
- 気候変動対策にとどまらず、ここには私たちが地球環境に対して向き合う基本的な姿勢が現れている。（→ 環境の有限性は人類を拘束する絶対的なものではなく、人間によって操作、管理、制御できるものである）
 - 確かに現在の科学技術は惑星改造ができるほどのものではない。しかし今後数10年かけてこうした未知の技術が開発され、人類がそうした技術にますます依存していく可能性がある。

4. われわれはどこへ向かっているのか？

□ 思考実験——環境加速主義が成功した世界とは？

- 社会環境による自然環境の「包摂」「惑星改造」が徹底された世界とは？
- 地球全体が空調完備されたビルの一室のように、地球全体が社会システムによって管理される。
- システムの管理（人工環境の「順応的管理」を含む）は専門家やAIが担当するため、一般人は、気候の状態や日々の暮らしのなかで環境負荷についていろいろと思い悩む必要はなくなる。SDGsが夢見た「誰ひとり取り残さない」世界の自己決定、多様性、自己実現を謳歌すれば良い。



□ 人間にとって都合良く形作られた人為的な「自然環境」に囲まれた世界。そのなかで「自然と人間の共生」が演出される。

→ 未来の人々は、それをみて「素晴らしい大自然」といって感嘆するのだろうか？

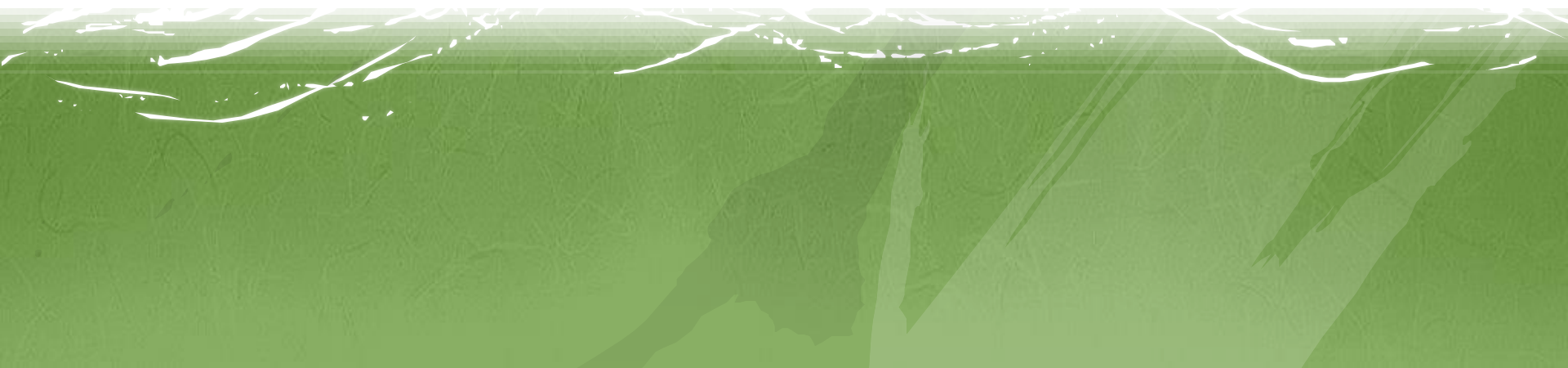
4. われわれはどこへ向かっているのか？

□ 思考実験——「カプセル社会」のユートピア

- しかしジオエンジニアリングの成功水準によっては、人類は巨大なカプセルの中に住み、カプセルの中でのみ先の「ユートピア」を実現できるかもしれない。カプセルの外部は人類が住めない不毛の地と化しており、そしてそうしたカプセルが宇宙にまで延々とつながっている——そうした世界になっているかもしれない。
- それでも人々はそのカプセルの中で「自然と共生」できており、経済成長と自己実現ができるのであれば、何が問題なのだろうか？

- 環境加速主義が成功した未来においては、いずれも環境問題は「撲滅」されている。前者は、自然環境を人工環境が包摂してしまっているため、後者は、人工環境が外環境と切り離されているため。
- 確かに環境問題は「解決」している。だがしかし・・・。

5. 結論と問題提起



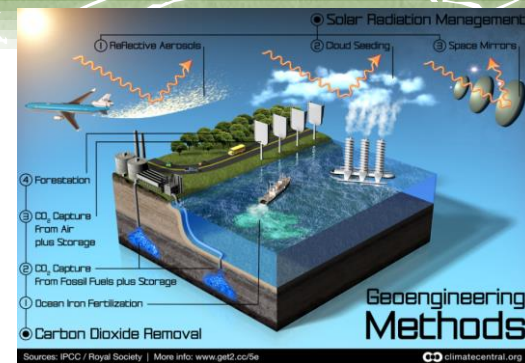
5. 結論と問題提起

□ 環境加速主義は本当に成功するのか？

- しかし科学技術が本当に環境加速主義が求めるような未来を約束してくれる保証など全くない。それは恐ろしく高リスクの“賭け”であると考えた方がよい。

- 一番恐ろしいのは、環境加速主義で何とかなるだろうと信じた結果、結局できなかったという事態ではないか？
（例えば50年以内に、地球の3分の1が人間の住めない土地になってしまったとしたら、何が起こるだろうか？）

- 人間的理想を負い、現状維持をしようとして、なし崩し的に危険な“賭け”へと向かう時代。
- 私たちはもう一度自らの立ち位置を整理してみるタイミングにきているのではないか？



climatecentral.org



5. 結論と問題提起

□ 欠けているのは「長期的ビジョン」

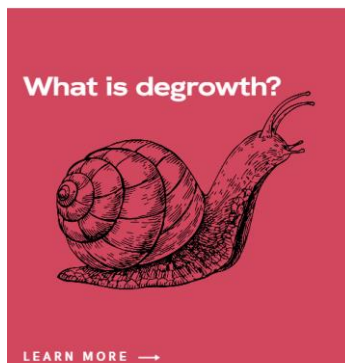
	短期的ビジョン	中期的ビジョン	長期的ビジョン
想定される期間	数年～10年程度	10年～数10年程度	数10年～100年以上
固有の役割	われわれが直ちに取組みなければならない課題を問題とする	短期的ビジョンが行き当たりばったりにならないために必要な目標を問題とする（ex. SDGs）	中期的なビジョンの先に、われわれが本質的に目指している世界を問題とする

- すべてのビジョンの射程に意味があり、それぞれの役割がある。
- 「エコ・ユートピア」はここでの「長期的ビジョン」に相当していた。そのアプローチはすでに形骸化し、影響力を失っている。
- SDGsは「中期的ビジョン」に相当するが「長期的ビジョン」を代替することとはできない。
- 欠落しているのは「長期的ビジョン」。

5. 結論と問題提起

□ 脱成長主義はなぜ難しいのか

- 環境問題および世界的な格差、貧困、不平等などを経済成長を至上目標とする社会の必然的な結果だと考える。
- 現在の社会の延長ではなく、環境収容力に収まる新しい社会をつくる。
- 脱成長は、意図してスローな社会をつくる（シンボルマークは“カタツムリ”）。それは「低成長」とは違う。
- 人類の目標は、ウェルビーイング（幸福、良きあり方、精神的な豊かさ）を実現すること



- 脱成長社会を実現するためには「対面的な相互扶助（非貨幣的な助け合い）」の領域を再構築することが不可欠となる。
- しかし、人々はそのような領域の再生を望まない。対面的な相互扶助を不可欠とする社会は、「共同行為の不可能性」によって、人々は望みたくても、それを望むことはできない。
- → そのため結局は、脱成長主義は環境加速主義を前に敗北する可能性が高い。
（このことが「里山」の議論とも無関係ではない？）

5. 結論と問題提起

□ 〈自己完結社会〉の成立

- **生きることの「自己完結化」と「共同行為の不可能性」：**
 - 社会システムを動かすのはひとりひとりの人間であるにもかかわらず、社会システムへの「接続」さえ維持できれば、究極的には誰とも直接的に関わらなくても生きていくことができる。
- → 結果的に人間は、他人と関わることに負担やリスクばかりを感じるようになり、直接的な人付き合いがさらに難しくなる（増田（2015）における「共同の動機」という概念）。

- われわれは、人類史上まれにみる最高水準の自由、平等、自己決定、多様性、自己実現が保障された世界を生きている。
- しかしそれは同時に、“貨幣”さえ入手できれば、必要なすべてのモノは通信販売で手に入り、多くの社会問題はどこか遠くの専門家が対処してくれる。X（twitter）やYouTubeだけで交流し、寂しささえ我慢すれば、極端な話、誰とも人格的に関わらなくても生きていける気がしてしまう、世界でもある。

5. 結論と問題提起

□ 〈自己完結社会〉の成立

□ 〈自己完結社会〉がもたらすもの：

→ プライベートや自己決定が保証された世界になれた人々は、「助け合い」で成り立つ世界を支える力を失っており、その自信もない。「生活」や「自治」を取りもどす選択よりも、「生活」や「自治」の根幹をシステムに委託し、プライベートな時空間を意のままに過ごせることを選択する。システムさえ、いずれは人間でなく、AI／アルゴリズム、ロボットの仕事となるかもしれない。

情報システム

- 自己決定が至上的価値を持つ世界では、たとえ「生活」を取りもどし「自治」を取りもどすという試みであっても、その人の趣味趣向の問題に還元され、正当性をえることも、目的を共有することもできない。
- このことが「技術しか信じられるものがない」という心情をもたらし、環境加速主義へと突き進む動力にもなっているのではないか？

5. 結論と問題提起

□ 結論と問題提起

- 今日主流のSDGsは、環境対策、経済成長、社会的公正の同時解決を目指す耳あたりの良い枠組みだが、事実上、「全人類が、富裕国水準の物質水準、社会水準を達成すること」を目指しており、それを実現するためには「地球1個分」では足りない可能性が高いという「不都合な真実」がある。
- 環境加速主義が成功した世界とは、環境問題が“撲滅”された世界であるが、すべての自然は人間にとって都合の良い人工物に置き換えられ、それをシステムが管理する世界でもある。そしてその道はきわめてリスクの高い“賭け”でもある。
- 過去30年あまりにわたり、人々の意識下には環境意識が浸透し、多くの実践が積み重ねられてきた。しかしかつて「エコ・ユートピア」が担ってきた「本質的にいかなる世界を目指すのか」という「長期的ビジョン」は形骸化し、私たちは目の前の問題解決と現状維持を図ろうとして、なし崩し的に環境加速主義へと向かっているように見える。
- 〈自己完結社会〉では「かかわり」「つながり」「全体性」の回復、「生活」や「自治」を取りもどすという目標（問題設定）は共有されず、正当性を獲得するのも難しい。そのようななかで、どのように「長期的ビジョン」を論じることができるのか、とりわけ哲学・倫理学の課題として問われている。

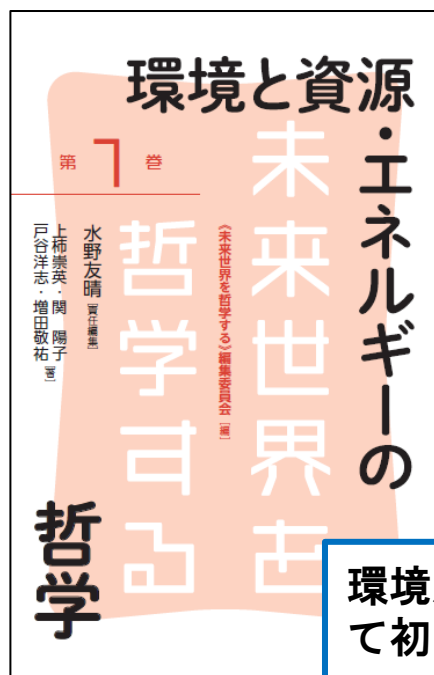
主な参考文献

- [上柿崇英 \(2022a\) 「『ポストヒューマン時代』における人間存在の諸問題—〈自己完結社会〉と『世界観=人間観』への問い」『総合人間学』、総合人間学会、第16号、pp.162-190](#)
- [上柿崇英 \(2023a\) 「『ポストヒューマン時代』と『ヒューマニズム』の亡霊—「ポストモダン」／「反ヒューマニズム」状況下における「自己決定する主体」の物語について」『総合人間学』、総合人間学会、第17号、pp.34-63](#)
- [上柿崇英 「『エコ』なき時代の環境思想とその行方—エコロジー、人新世、ポストヒューマンが映し出す「地球1個分」問題と「脱身体化」問題について」『環境思想・教育研究』環境思想・教育研究会、vol.16、2023b年](#)
- [上柿崇英 「世界観としての『思念体』とその構造—メタバース、ヒューマノイドが拓く新しい世界観と「脱身体化」の未来について」『共生社会システム研究』共生社会システム学会、Vol.17 No.1、2024年](#)
- 海上知明『環境思想—歴史と体系』NTT出版、2005年
- 鬼頭秀一 (1996) 『自然保護を問いなす—環境倫理とネットワーク』ちくま新書
- 小原秀雄『現代ホモ・サピエンスの変貌』、朝日選書、2000年
- 小原秀雄監修／阿部治／R・エバノフ／鬼頭秀一解説『環境思想の出現（環境思想の系譜1）』東海大学出版会、1995年
- 斎藤幸平『人新世の「資本論」』集英社新書、2020年
- 神野直彦／澤井安勇編 (2004) 『ソーシャル・ガバナンス—新しい分権・市民社会の構図』東洋経済新報社
- 多辺田政弘 (1990) 『コモンズの経済学』学陽書房
- 森林総合研究所関西支部『里山に住む生き物—滋賀県内の調査から』2005年
- 水谷広『気候を人工的に操作する：地球温暖化に挑むジオエンジニアリング』化学同人、2016年
- [吉田健彦 \(2021\) 『メディオーム-ポストヒューマンのメディア論』共和国](#)
- 増田敬祐 (2015) 「生命と倫理の基盤—自然といのちを涵養する環境の倫理」竹村牧男／中川光弘監修／岩崎大／関陽子／増田敬祐編著『自然といのちの尊さについて考える』ノンブル社、157-202頁
- [増田敬祐 \(2020\) 「存在の耐えきれない重さ—環境における他律の危機について」『現代人間学・人間存在論研究』大阪府立大学環境哲学・人間学研究所、第4号、pp.313-378](#)
- 安田喜憲『森と文明の物語』筑摩新書、1995年
- J・カリス／S・ポールソン／J・ダリサ／F・デマリア『なぜ、脱成長なのか—分断・格差・気候変動を乗り越える』上原裕美子／保科京子訳、NHK出版、2021年
- J・グレイ『わたらの犬—地球に君臨する人間』池央耿訳、みすず書房、2009年
- T・コスティゲン『地球をハックして機構危機を解決しよう—人類が生き残るためのイノベーション』穴水由紀子訳、インターシフト、2022年
- N・スルニチェク／A・ウィリアムズ「加速派政治宣言」水島一憲／渡邊雄介訳『現代思想』青土社、vol.46-1、pp.176-186、2018年
- S・ディクソン=デクレーブほか『Earth for All 万人のための地球—『成長の限界』から50年 ローマクラブ新レポート』武内和彦監訳／ローマクラブ日本監修／森秀行、高橋康夫ほか訳、丸善出版、2022年
- C・ボヌイユ／J=B・フレソズ『人新世とは何か—〈地球と人類の時代〉の思想史』野坂しおり訳、青土社、2018年
- C・ポンティング『緑の世界史』上、石弘之／京都大学環境史研究会訳、朝日新聞社、1994年
- S・ラトゥーシュ『脱成長』中野佳裕訳、白水社、2020年
- N・ランド『暗黒の啓蒙書』五井健太郎訳、講談社、2020年
- J・ロックストローム／M・クルム『小さな地球の大きな世界—プラネタリー・バウンダリーと持続可能な開発』武内和彦、石井菜穂子監修／谷淳也、森秀行ほか訳、丸善出版、2018年
- M・ワケナゲル／W・リース『エコロジカル・フットプリント地球環境持続のための実践プランニング・ツール』和田喜彦監訳／池田真理訳、合同出版、2004年
- R.Mackay, A.Avanessian (2014) #Accelerate: The Accelerationist Reader, Urbanomic.

□ [発表者ウェブサイト](#)、および[発表者note](#)で、[過去の論文](#)、[関連記事](#)などを閲覧できます。

著書紹介

- 上柿崇英「人類社会と環境の未来—「地球1個分」問題と環境加速主義の時代」『環境と資源・エネルギーの哲学——未来世界を哲学する（第1巻）』水野友晴編、丸善出版
- 上柿崇英『〈自己完結社会〉の成立——環境哲学と現代人間学のための思想的試み（上巻・下巻）』農林統計出版社。



環境加速主義について初めて本格的に論じたもの



ご静聴ありがとうございました

※なお、本スライドの画像の出典は、以下のとおりです。

- 国際連合広報センター (<https://www.unic.or.jp/>)
- Wikipedia (著作権フリーの画像に限る) (<http://ja.wikipedia.org/>)
- フリー素材集いらすとや (<https://www.irasutoya.com/>)
- パブリックドメインQ：著作権フリー画像素材
(<https://publicdomainq.net/>)
- GAHAG | 著作権フリー写真・イラスト素材集 (<http://gahag.net/>)